【研究概要】

子どもの心に灯がともる学びの創造
～子どもの思考に寄り添った理科・生活科～

１　主題設定の理由と研究経緯

現行の学習指導要領では、教育基本法や学校教育法などを踏まえ、これまでの学校教育の成果を生かしつつ、子どもが未来を切り拓くための資質・能力を確実に育成することを基本方針として示している。

予測困難な時代を生きる子どもたちに必要な資質・能力を育成するために、学校教育には子どもたち一人ひとりの興味・関心や学習状況、発達の特性等を踏まえた指導の充実が求められている。また、子どもたちが学習の見通しをもち、自らの学習状況を振り返りながら学びを調整するなど、主体的に学習に取り組む態度を育成することが重要である。さらに、子どもたちの成長やつまずき、悩みを丁寧に理解し、個に応じた支援を行うことが一層必要となっている。

加えて、問題解決を柱とした学習や体験活動、他者との対話や協働を重視した学習を通して、多様な考えに触れながら自己の考えを広げ、深め、「主体的・対話的で深い学び」を実現することが求められている。一人ひとりの個性や可能性を生かしながら、新たな価値を創造し、持続可能な社会の創り手として必要な資質・能力を育成していくことが期待されているのである。

本校の目指す子ども像は、「知・徳・体をバランスよく鍛える子ども」である。その中でも、「自ら考え、判断する力」や「他者と関わりながら学ぶ態度」は、本研究で重視する育成すべき資質・能力と深く関わっている。また、子ども自身が問いや目的意識をもち、見通しをもって学習を進めることや、学びを振り返りながら次の学習へとつなげていくことは、「進んで学ぶ子」や「意欲をもって生活する子」という目指す子ども像の実現につながるものである。

これまで本校では、目的に向かって『子どもの心が動く』ことが学びの原動力になると考え、知的好奇心の醸成、成就感や達成感を得られる実践を重ねてきた。理科の学習では、単元構成を工夫し、事物・現象とじっくりと関わり問題を見いだす場や観察・実験の場を工夫することなどを通して、子どもたちが「なぜだろう」「もっと調べたい」という意欲を持続させながら学習に向かう姿が増えてきた。また、生活科の学習では、生き物の栽培・飼育やおもちゃ作り、学区探検等、体験活動を充実させる工夫などを通して、子どもの気付きの質を深め、自らの思いや願いを実現しようとする姿が多く見られるようになってきた。

一方で、問題解決の過程で試行錯誤しながら粘り強く追究したり、学習した内容を日常生活と結びつけて学ぶ意義を実感したりするまでには至っていない現状がある。

生活や社会とのつながりを実感しながら問題を追究する意欲を持ち続け、子ども自身が学ぶことの有用感を持ち、自らの成長を実感する授業を創り上げるためには、これまでの取組を整理するとともに、子どもが解決したい問題や活動への思いや願いを大切にし、教材選定や指導過程、学習形態や他教科との関連を図るといった単元全体の構成を工夫することによる授業改善を進めていく必要があった。

そこで、令和６年度より、研究主題を「『子どもの心に灯がともる学びの創造』～子どもの思考に寄り添った理科・生活科～」と設定し、子どもたちが主体となる問題解決に加え、「学ぶ有用感」や「自己の成長」に気付ける指導の工夫に取り組んできた。

令和８年度からは、日常的に取り組んでいる「理科日記」に、新たに「自己の学び方を振り返る視点」を加え、学ぶ意義や自己の成長の実感する実践に取り組んでいる。

教師自身が子どもたち一人ひとりの思考に寄り添い、目指す子どもの姿を想定しながら授業改善を図ることで、研究主題である「子どもの心に灯がともる学び」の創造を目指したい。

２　今年度の研究について

２　主題、副題について

（１）主題について

本校では、「心に灯がともる」状態を、子どもの心が動き、「なぜだろう」「やってみたい」「もっと知りたい」という思いや願いをもち、自ら学びに向かっていく姿であると捉える。学習の場面で想定される「心に灯がともった子どもの姿」の例として以下に３つ示す。

① 問題の追究に向けた活動への意欲が高まっている姿
② 学習で得た知識や気付きを、次の学習や生活に生かそうとしている姿
③ 学習の過程を振り返り、自らの考えや学び方の変化に気付き、成長を実感している姿

子どもの「心に灯がともる」ことにより、子どもの主体的な学習が実現し、目指す資質・能力が更に伸ばされていくだけでなく、その灯をもとに自らの未来を切り拓いていく力が育成されると考える。また、このような「心に灯がともる学び」は、教師が一方的につくるものではない。本校では、子どもと教師の双方が学びを創造する主体であり、それぞれの働きが重なり合う中で、「心に灯がともる学び」が創造されていくと捉える。

（２）副題について

本校では、子どもと教師の双方で学びを創造していくために、子どもの思考に寄り添うことを大切にする。「子どもの思考に寄り添う」とは、学習過程で対象と関わる中で生まれる子どもならではの素朴な思いや疑問を起点とし、その思考のつながりを大切にしながら、次の学習へとつなげ、展開していくことを指す。この過程が主体的な学びを生み出し、資質・能力の育成につながると考える。そのためには、子どもの興味・関心を引き出し、その後の問題追究への意識が続くように単元構成を工夫することが重要である。

その際、教師は子どもの発言や行動の背景にある思いや考えを見取り、その価値を見いだし、学習の中に適切に位置付けていくことが求められる。「なぜそのように考えたのか」「どのような経験や既習の内容と結び付いているのか」「次に何を確かめたいと思っているのか」といった子どもの内面に目を向け、一人一人の思考がどのようにつながり、どこへ向かおうとしているのかを捉えていく。

このような子どもの学びと、それを支える教師の指導とが相互に作用することで、「心に灯がともる学びの創造」が図られると考える。



３　千葉大会　大会主題との関連

（１） 主題との関連

千葉大会では、「学びと指導の調和」を、子どもが主体的に問題を追究し、他者との対話や試行錯誤を通して理解を深める学びと、教師による意図的・計画的な指導とが一体的に機能し、子どもの資質・能力の育成につながる状態と捉えている。

本校が研究主題に掲げる「子どもの心に灯がともる学びの創造」は、子どもの学びと教師の指導とが重なり合い、子どもと教師の双方が学びを創造していくことを目指すものである。このように、本校が目指す「子どもの心に灯がともる学び」は、まさに千葉大会が掲げる「学びと指導の調和」が実現された授業であると考える。

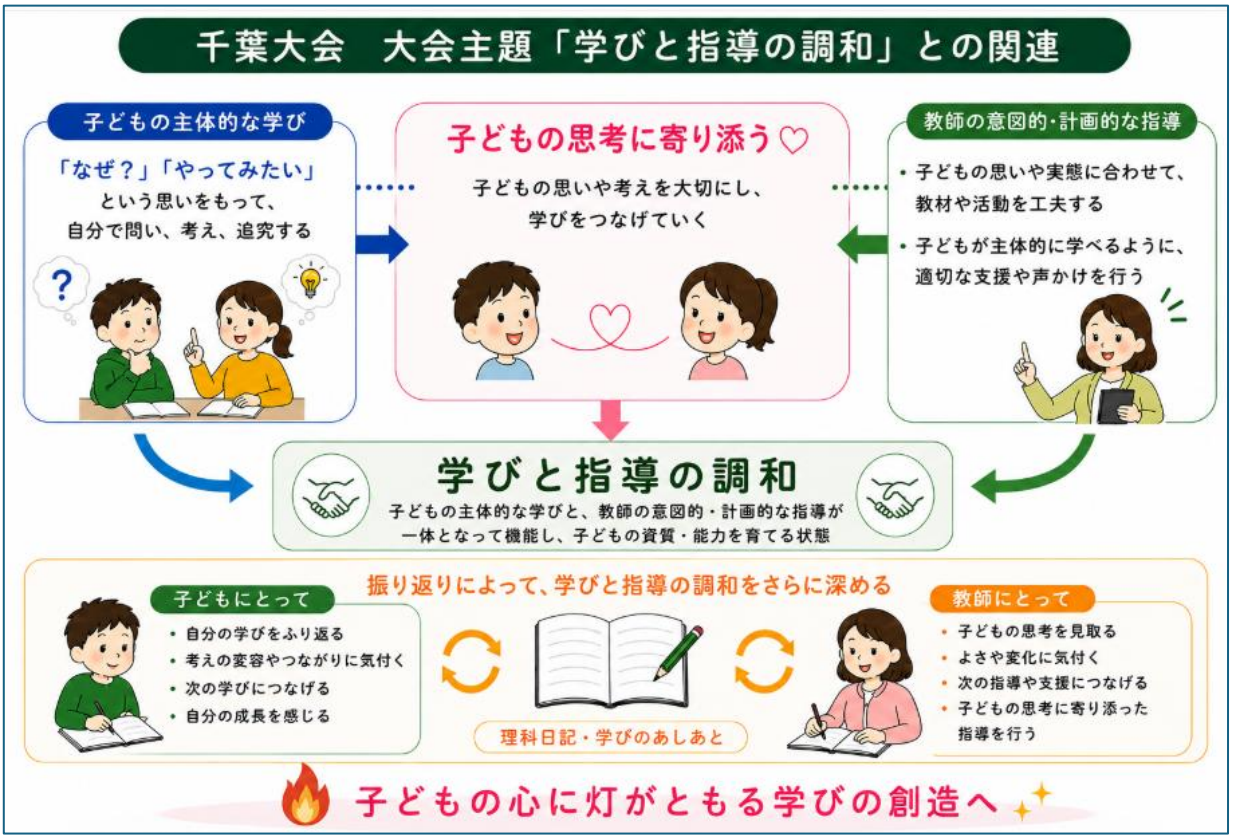
そこで本校では、子どもの「学び」と教師の「指導」をつなぐ上で、「子どもの思考に寄り添う」ことを大切にする。子どもの思考の流れを見取り、教師の分析と見通しを基に柔軟に子どもの思考に添って学びを展開することで、「学びと指導の調和」の実現を目指す。

（２） 実践との関連

本校では、「学びと指導の調和」を図るための一つの手立てとして、自己評価や自己調整を促す「振り返り（理科日記、学びのあしあと）」を大切にしている。振り返りを通して、子どもは「何が分かったのか」「次にどんなことを知りたいのか」といった視点から、自らの学びを見つめ直すことができる。また、学習内容の理解だけでなく、「どのように考えが変わったのか」といった他者との関わりによる考えの変容や、学んだことと生活とのつながりなどを捉え直すことで、学ぶことの価値や自らの成長を実感することにもつなげることをねらいとしている。

一方、振り返りは、教師にとっても子どもの思考を見取る大切な機会となる。そこに表れた気付きや考えの変容、つまずき、次に追究したいことなどを丁寧に見取り、その価値を捉えることで、子どもの思考に寄り添った次の指導へとつなげることができる。

このように、振り返りを子どもにとっては自らの学びを見つめ、次の学びへとつなげる場、教師にとっては子どもの思考を見取り、次の指導へとつなげる場としている。



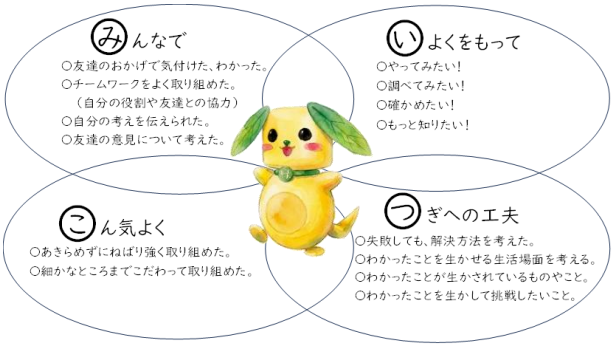
「理科日記」（理科部会）

【ねらい】

子どもが自らの学習状況を把握し、自己の変容や成長を自覚することをねらいとする。子ども同士で共有することで互いの成長を認め合うきっかけにしたり、教師は理科日記から子どもの気付きや新たに見いだした問題を把握し、子どものわかり方に即した単元構成に反映させ、子どもの思考に寄り添った学びの実現に向けて生かしたりする。

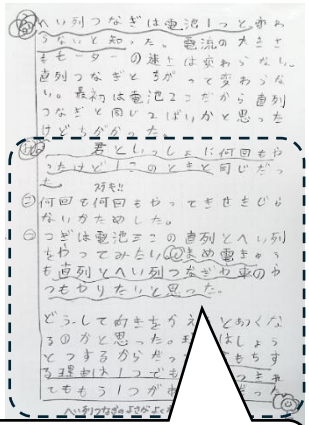
【実践内容】

子どもは毎時の学習後に学習を通して考えたことや気付いたことを書く。さらに自らの学習状況について把握するために、以下の「みいちゃんのこつ」に着目して振り返ることで、自らの学習の進捗や学び方を捉え、自己の変容や成長を実感できるようにする。

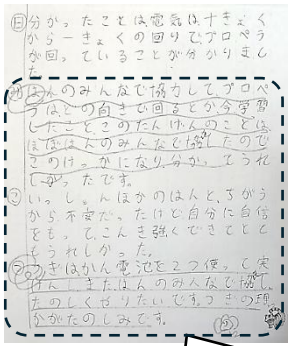


【４年生　「電池のはたらき」】

授業で学んだことや考えたこと、新たに挑戦したいことを書いたものに加え、「みいちゃんのこつ」に示されている視点をもとに振り返りを行った。自らの学びに向かう姿勢や協働的に学ぶことの有用感を客観的に捉えたことで学習への意欲の高まりが見られた。



子どもが次に挑戦したいことを考え、教師はねらいに沿って授業に取り入れる。



友達と協力したり、粘り強く取り組めたりした自分を自覚できた。

「学びのあしあと」（生活科部会）

【ねらい】

子どもが自分の思いや願いについて見つめ直し、次の活動に意欲をもって取り組むことができるようにするために学びのあしあとを活用する。

【実践内容】



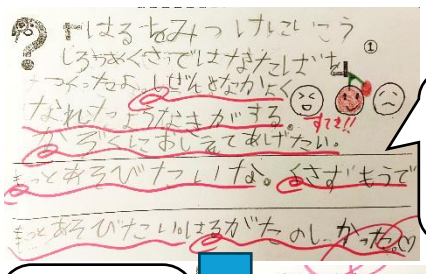
大単元の終末では、単元を振り返りできるようになったことを書く。それによりどんな思いや願いをもったのかなど、今後に向けての思いや願いも書く。

小単元が終わるごとに振り返りを書く。その際、ゴールまでの道に「あしあと」シールを貼る。

大単元の導入では、この単元を通してできるようになりたいことを書く。

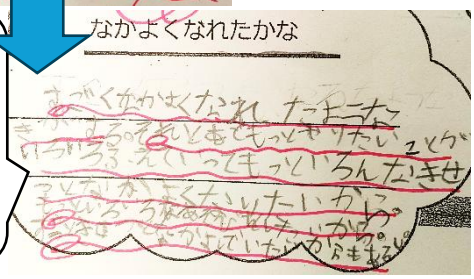
教師は、一人一人の思いや願いを見取り、次の活動への指導・支援の計画を立てるために、子どもが山のどの高さまでシールを貼ったかを確認する。位置が低い子どもには個別に声をかけ、思いや願いに耳を傾ける。話を聞いた上で、どうしたら次はうまくいくのか、本時のねらいは何だったのかなどの個に応じたフィードバックや助言を行い、次時への意欲付けができるようにしていくことを目指す。

【１年生　「きせつとなかよしはる・なつ」】



学校の芝生遊びや公園探検を振り返り、春の遊びについて思いや願いを書いている。

春・夏の遊びが終わり、大単元終末時の思いや願いを書く中で、今後の活動への期待を書いている。



４　研究の視点について【理科】

４　研究の視点について

【理科】

【視点１】
子どもが心を動かし、主体的に問題解決しようとする指導・支援の工夫

理科において「子どもが心を動かす」場面とは、不思議な現象や調べ続けたいと思う自然の事物・現象に出会い、自らが立てた予想や仮説、解決の方法を検証しようとするときである。心が動けば、問題を解決したときにより大きな充実感を味わったり、次の問題解決への意欲を高めたりすることができるだろう。子どもの心を動かし、主体的な問題解決を実現させるためには、子どもの興味・関心を引き起こす教材を選定し、問題を追究し続ける意欲を喚起する指導過程や教具の工夫が必要である。

①問題を見いだす場面の工夫

子ども自身が問題を見いだし、学習を通してその問題を追究していきたいと感じる事物・現象との出会いを大切にする。理科の見方・考え方を働かせて、既習の内容と目の前の事物・現象を結び付けたり、子どもの実態を把握した上で生活経験と関係付けたりすることで、子ども自身が「確かめたい」「調べてみたい」と思える問題を見いだせるようにする。

②子どもの思いに寄り沿った指導計画の工夫

問題解決を繰り返す中で、子どもは新たな問題を見いだす。追究する意欲をもち続けながら学習を進めていくことができるように、子どもの思考の流れや連続性を意識した指導計画を立てる。子どもが見いだした問題を軸とした追究は、目的意識と見通しをもった主体的な学びにつながる。

③指導法の工夫

単元の目標に合致し、児童の実態に即した教材を工夫したり、理解が深まる教具を用いたりする。問題を見いだす場面や、観察・実験を通して検証する場面などの指導法を工夫し、安全に配慮した環境下で子どもの知的好奇心を高め、追究活動を活性化させる。

【視点２】
学びを通して、新たな価値を創造していく手立ての工夫

本校が捉える理科における「新たな価値」とは、次のとおりである。

・学習で得た知識が活用できたり、生活に生かされたりすることに気付くこと
・問題解決の過程への振り返りや、他者との関わりを通して、自らの学習への取り組み方の変化に気付くこと

これまで本校では、友達との対話や考えの共有など、他者との関わりを通して、自らの考えを広げたり深めたりする学びを大切にしてきた。今年度も、こうした学びをこれまでの実践を支える基盤として継続していく。一方で、今年度は、習得した知識をさらに深めたり、学んだことと日常生活や社会とのつながりを実感したりすることを、より重視していく。子どもが学習で得た知識を別の事象や場面に活用したり、「もっと確かめたい」と新たな問題を追究したりすることで、これまでの知識をより確かなものにしていく。さらに、問題解決の過程を振り返り、自らの考えや学び方の変化や成長を実感することも、重要な価値として位置付ける。

①習得した知識を深める工夫

学習内容と関連した発展的な内容を扱ったり、子どもがもっと調べたいと考えた問題を解決する時間を設けたりして、習得した知識を深める場面を設定する。子どもの思考の連続性に寄り添いながら発展的な学習を取り入れることで、より深い学びにつながり、その後の学習や生活への活用を促す。

②日常生活との結びつきを実感するための工夫

学習内容と日常生活との結びつきを実感させることで、理科を学ぶ有用感を育み、その本質的な価値に気付かせる。習得した知識・技能を活用するものづくりや、他の教科・領域と教科横断的な学習を行ったりする。理科の学習で得たものが教

科内だけではなく、日常生活や社会と深く関わっていることに気付かせる。

【生活科】

【視点１】
子どもの心を動かし、主体的に思いや願いを実現しようとする指導・支援の工夫

生活科においては、子どもが対象に向けて「やってみたい」「調べてみたい」と自分の思いや願いをもつことが大切である。そのためには、教師が子どもの思いや願いを想定した学びの計画を立てたり、学びを振り返る場面を意図的に設定したりしていく必要がある。思いや願いを実現する過程においては、子どもは体験活動によって様々なことに気付くと同時に、活動の楽しさを味わうだろう。この体験活動で得られた多様な気付きは、子どもが言葉や絵を使った多様な表現活動によって表出することで、質の高い気付きに結びついていく。また、対象と深く関わる体験活動と、学びを振り返る表現活動を繰り返すことで生まれた満足感や成就感などの手応えは、次の学びへの意欲と態度へとつながる。さらに、友達と関わり合う中で、自分の成長に気付き、自信をもつことができる。

子どもの心を動かす具体的な場面としては、子どもの興味や関心のある「魅力的な教材」や「地域人材・素材を生かした学び」など、導入場面の工夫が考えられる。自分の思いや願いを実現していくことは、自らの学びを次の活動やこれからの生活に生かしたり、新たなことに挑戦したりしようとする自己実現につながる。

①単元構成の工夫

子どもの思いや願いが次の活動へつながるよう、体験活動と表現活動を繰り返しながら、主体的に活動できる単元を構成する。

②教材・教具・場の工夫

子どもが「やってみたい」「もっと関わりたい」と思える身近で魅力的な教材・教具を選定・工夫する。また、家庭や地域と連携し、思いや願いを伸び伸びと実現できる場を設定する。

③他教科との関連

生活科での体験や気付きを他教科と関連付け、他教科で身に付けた知識や技能を活動や表現に生かすことで、思いや願いの実現に向けて主体的に取り組む姿を育む。

【視点２】
「人」「もの」「こと」との関わりを通して気付きの質を高める手立ての工夫

子どもは一人一人感じ方や捉え方に違いがあり、それぞれのよさをもっているため、対象に対する一人一人の「個別の気付き」を大切にしていく。授業においては、活動の中で無自覚に生まれた気付きを表現し、伝え合い・共有することで、子ども自身が自覚できるようにする。

「個別の気付き」を出し合う中で、それぞれの気付きを比べたり発展させて考えたりすることにより、「関連付けられた気付き」が生まれ、気付きの質が高まっていく。そのため教師には、個々の気付きを相互に比較・関連付けられるような発問や価値付けを行い、学びを深めていく支援が求められる。

また、生活科では、「人」「もの」「こと」などへの「対象への気付き」から、「自分自身についての気付き」へと高めていくプロセスを特に重視している。子どもが気付きの質を高めるためには、繰り返し活動したり対象との関わりを深めたりする活動や体験を充実させることが不可欠である。

視点１で掲げた子どもの「やってみたい」「もっと～したい」という思いや願いを的確に捉えた上で、具体的な活動や体験を展開する。その中で身近な「人」「もの」「こと」と適切に関わる場面を設定し、自らの気付きについて交流する手立てを講じていく。

子どもの思いや願い、そして気付きは相互に作用しながら深まっていくものである。体験活動と表現活動が豊かに往還する過程を捉え、主体的な関わりを生み出すことで、対象への理解を深めるとともに、自らの成長を実感する価値ある気付きを育む。

５　研究を支える日常実践

本校では、子どもの思考に寄り添う授業改善を進めていく上で、理科だけではなく、日常の授業や活動を大切にし、学校全体で様々な取組を進めている。日々の授業では、「みどりのめがね（見方）」を活用し、子どもが見方を働かせながら、対象と関わることができるようにしている。日常生活の中から問題を見いだす力や気付きの質を高める「発見！みどりカード」や、思いや願いの実現に向け試行錯誤を繰り返しながら科学工作を行う「科学のひろば」、観察・実験の技能を身に付ける「科学の検定」など、子どもが日常的に科学に親しみを感じながら関わることのできる機会を設けている。

これらの取組は、子どもの主体性を大切にしながら、ここで得た力が理科や生活科を中心にした教科の学習や日常の生活に役立つことを目的として継続的に行っている。

以下に、それぞれの取組のねらいと実践内容についてまとめたものを記載する。

日常実践	内 容
みどりのめがね	理科の見方を働かせながら 対象に関わる力を育てます。
発見！ みどりカード	日常の気付きから、 問いを見いだします。
科学のひろば	科学工作を行い、 思いや願いの実現に向けて、 試行錯誤し取り組み続けることのできる力を育てます。
科学の検定	観察・実験の技能を身に付け、 科学的に探求を支える 基礎の力を育てます。

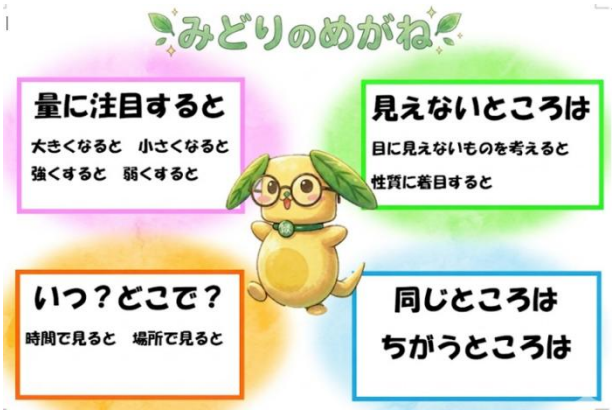
日常実践①　「みどりのめがね」

【ねらい】

自然の事物・現象に対する理科的な「見方・考え方」を主体的に働かせ、科学的な資質・能力を育成することをねらいとする。「見方・考え方」を単に知識として教え込むのではなく、子どもの発言や振り返りの記述から教師がそれらを的確に見取り、価値付けるための指標とする。

【実践内容】

事前に教師は、単元・その時間でどのような見方・考え方を働かせるとよいか見通しをもつ。授業中、ねらいに沿った子どもの発言を取り上げ、プレートを掲示し意識させるとともに、対象への働きかけ方を価値付ける。



【４年生　「とじこめた空気と水」】

導入で、閉じ込めた空気を圧した際に出てくる質的・実体的な見方を教師が称賛し、「みどりのめがね」として学級全体で共有した。子どもが「みどりのめがね」を意識して発言したり記述したりするなど、意識的に理科の見方・考え方を働かせ、問題意識をもつことでその後の学習で資質・能力を習得する姿が見られた。

日常実践②　「発見！みどりカード」

理科（３年生以上）

【ねらい】

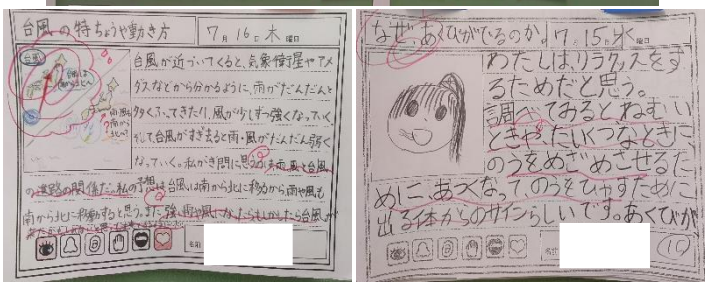
身の回りから疑問や問題を見付ける活動を通して、問題を見いだす力を養う。

【実践内容】



子どもは、日常生活や理科の学習で不思議に思ったことについて、「みどりカード」に表す。子どもが不思議さを感じたときにかき、１年間積み重ねていく。教師が波線や花丸を付け称賛し、教室前の廊下に掲示する。





生活科（２年生以下）

【ねらい】



無自覚だった気付きを自覚できるようにしたり、気付きを関連付けたりして、気付きの質を高められるようにする。

【実践内容】

生活科の学習中に「はっけん！みどりカード」をかく時間を設定する。子どもが、見付けた（気付いた）人・もの・ことについて、絵・図・言葉を使って表し、どのような感覚を働かせたか振り返る。内容について友達と伝え合うこともある。教師が波線や花丸を付けて称賛し、１年間教室前の廊下に掲示して積み重ねていく。

日常実践③　「科学のひろば」

【ねらい】

１～３年生を対象に、科学のおもしろさや不思議さに気付かせるとともに、思いや願いに沿って対象と繰り返し関われる試行錯誤の場を作る。

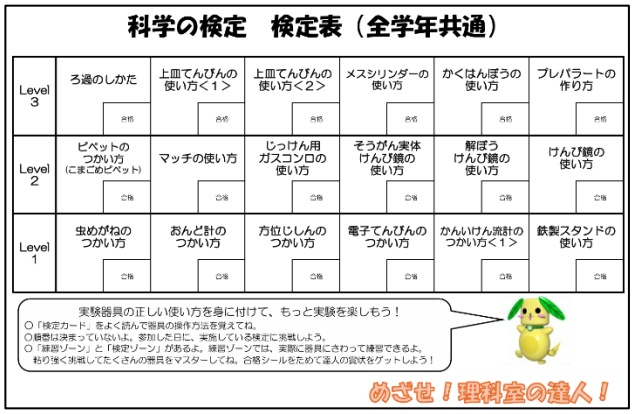
日常実践④　「科学の検定」

【ねらい】

３年生以上を対象に、実験器具の正しい操作方法を習得する機会を確保する。（昨年度より実施）

【実践内容】

事前に配付した器具の操作方法が書かれたシートを読んで練習し、検定の日に教師のチェックを受ける。多くの子どもが参加し、授業の中だけでは定着することの難しい器具の操作方法を正しく身に付けることができる。



主題 子どもの心に灯がともる学びの創造

理科

目指す学びの姿

- 自ら見いだした問題に、粘り強く向き合い、自然に親しむことができる子ども
- 学ぶことの意義や自らの成長に気付き、学びを生かす子ども

視点 1

子どもの心を動かし、主体的に問題解決しようとする指導・支援の工夫

視点 2

学びを通して、新たな価値を創造していく手立ての工夫

子どもの思考に寄り添う

学びと指導の調和



生活科

目指す学びの姿

- 思いや願いを自覚し、その実現に向けて身の回りの対象と進んで関わり合う子ども
- 「人」「もの」「こと」との関わりを通して、気付きの質を高める子ども

視点 1

子どもの心を動かし、主体的に思いや願いを実現しようとする指導・支援の工夫

視点 2

「人」「もの」「こと」の関わりを通して気づきの質を高める手立ての工夫

理科日記

子どもにとって

- 学び方を見つめ直し、次の学びにつなげる
- 考えの変容に気付き、自分の成長を実感する。

教師にとって

- 子どもの思考を見取り、指導に生かす。
- 子どもの成長を価値づけ、称賛する。

学びのあしあと

子どもにとって

- 学びの過程や気付きの広がりを整理し、積み重ねを実感する。
- 思いや願いの変容に気付き、自分の成長を実感する。

教師にとって

- 思いや願いの変容や気付きの質の高まりを見取り、指導に生かす。
- 子どもの成長を価値づけ、称賛する。



学びを支える日常実践

みどりのめがね

見方・考え方を働かせ、ものごとを多面的に見る力を育てる

発見！みどりカード

日常の生活の中での「なぜ？」「気付き」を大切にし、問題を見いだす力を育てる

科学のひろば

試行錯誤しながら科学工作等を楽しみ、創造する力を育てる

科学の検定

観察・実験の技能を身に付け、探究する力を育てる

理科における「子どもの心に灯がともる学び」

自然の事物・現象に対して興味・関心をもち、自ら見いだした問題に対して学び続ける姿を目指します。

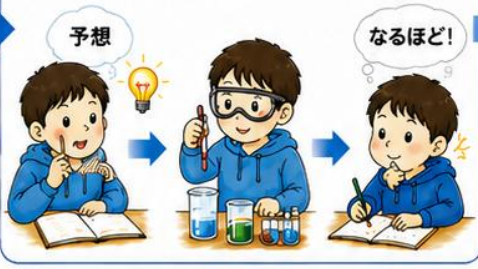
① 心が動く

「なぜ？」「調べたい！」
→ 自ら問題を見いだす



② 追究する

予想する → 試す → 考える
→ 粘り強く問題を解決する



③ 学びが広がる

「もっと調べたい！」
→ 新たな問題へ
→ 学んだことを
生活に生かす





子どもの思考に寄り添い、教材・学習環境・働きかけを工夫する

理科で目指す子どもの姿

自ら見いだした問題に、
粘り強く向き合い、
自然に親しむことができる子ども

学ぶことの意義や自らの成長に気付き、
学びを生かす子ども

視点 1　子どもの心を動かし、主体的に問題解決しようとする指導・支援の工夫

① 問題を見いだす場面の工夫



- 「なぜ？」「やってみたい」を引き出し、興味・関心を高める。
- 学習内容を生活経験とつなげ、解決の見通しをもたせる。

② 指導計画の工夫



- 子どもの思考のつながりを想定する
- 子どもの思考に添い、柔軟に変更する

③ 教材・教具の工夫



- 子どもの思考に寄り添った教材・教具を工夫する
- 適切な働きかけや支援を行う

視点 2　学びを通して、新たな価値を創造していく手立ての工夫

深い学びへとつなぐ工夫

① 学んだ知識と活用する



- 習得した知識を生かす
- 知識を結び付けて考える

② 生活と結びつける



- 身近な生活とのつながりを考える
- 学びの価値や有用感を実感する

学び方の工夫

① 他者と学びを共有する



- 友達と考えを伝え合い、学びを深める

② 理科日記で振り返る



- 学びの過程を振り返り、次の学びにつなげる

生活科における「子どもの心に灯がともる学び」

自然や人、身近なものやことと関わる中で、思いや願いをもち、気付きの質を高め、よりよい生活につなげていく。

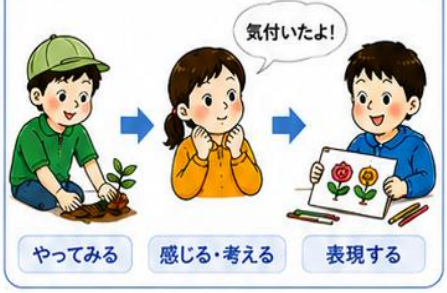
① 心が動く

「やってみたい!」「もっと知りたい!」
→ 思いや願いをもつ



② 活動する

やってみる → 感じる・考える → 表現する
→ 思いや願いの実現に向けて
繰り返し関わる



③ 学びが広がる

「もっとやりたい!」「次はこうしたい!」
→ 新たな思いや願いへ





子どもの思いや願いに寄り添い、教材・学習環境・働きかけを工夫する

生活科で目指す子どもの姿



思いや願いを自覚し、
その実現に向けて身の回りの対象と
進んで関わり合う子ども

「人」「もの」「こと」との関わりを通して、
気付きの質を高める子ども



【視点1】
子どもの心を動かし、主体的に
思いや願いを実現しようとする
指導・支援の工夫

思いや願いをもつ ➡ 活動や体験をする ➡ 感じる・考える ➡ 表現する
繰り返し行う

指導・支援の具体化

1 思いや願いをもつ場面の工夫
- 「やってみたい!」を引き出す導入
- 地域人材との出会い



2 思いや願いに寄り添った学び活動の工夫
- 体験活動と表現活動を繰り返す
- 子どもの思いや願いを次の活動につなぐ

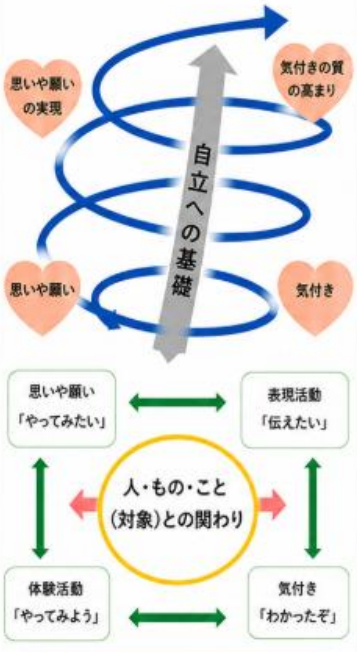


3 教材・教具や場の工夫
- 身近で夢中になる教材
- 家庭・地域との連携
- 適切な働きかけや支援



体験と表現を繰り返し、
自分の成長を感じながら学ぶ子どもを育てます。

〈生活科における思いや願いと気付きの関わり〉



体験活動と表現活動を繰り返し、
思いや願いと気付きが往還することで、
気付きの質が高まり、学びが深まる。

【視点2】
「人」「もの」「こと」との関わりを通して、
気付きの質を高める手立ての工夫

一人一人の気付きをつなげ、深めることで、
自分自身への気付きを育てます。

1 気付きを自覚する場面の工夫
- 「人・もの・こと」とじっくり関わる場の設定
- 気付きを絵や文で表す時間の確保



2 気付きを関連付ける伝え合いの工夫
- 気付きを比較、分類する場の設定
- 気付きの共通点や相違点を確認する時間の確保
- 気付きを関連付ける働きかけ



3 自分自身への気付きにつなげる振り返りの工夫
- 自分の学びを振り返り、次の学びにつなげる振り返りシートの工夫
- 自分のよさや成長を実感できる教師の声掛け



気付きの質の高まりが、
思いや願いの実現や次の活動につながります。